

Sāṅkarṣa-kāṇḍa をめぐる諸問題

—Mīmāṃsā 研究序説—

金 沢 篤

I はじめに

ミーマーンサー派⁽¹⁾の成立・展開に関してはなお不明確な部分が多い。

そうした中、フィンランドの A. Parpola によって “On the Formation of the Mīmāṃsā and the Problems concerning Jaimini”⁽²⁾ という甚だ魅力的なタイトルを持つ意欲的な論文 (未完) が発表された。そこで、Parpola によって提出された学説は、「Śārīraka (= Brahma-sūtra) も Jaimini が著わした」と解し得る Sureśvara の証言⁽³⁾を文字通り認めるものである。そして Jaimini と Bādarāyaṇa にそれぞれ帰されるいわゆる Mīmāṃsā-sūtra (MS) と Brahma-sūtra (BrS) が本来 Jaimini の手になる単一な作品 Ur-MS の各々 Pūrva-kāṇḍa (Pūrva-K) と Uttara-kāṇḍa (Uttara-K) に基づいて成立した、と主張するものである。

またこの Parpola の論文と同時に発表された論文にアメリカの R. W. Lariviere による “Madhyamamīmāṃsā — The Sāṅkarṣakāṇḍa”⁽⁴⁾がある。やはり Parpola のものと同様 Mīmāṃsā の歴史についての研究であるが、Parpola のものが初期 Mīmāṃsā 史もしくは Mīmāṃsā 前史をめぐってのものであるのに対し、この Lariviere のものは謂わば Mīmāṃsā の裏面史を扱ったものである。従来、一般には種々刊本に明らかな通り、MS が12章、BrS が4章より構成されていると説明されてきたのであり、事実ミーマーンサー派、ヴェーダーンタ派の学説も主としてその両經典に

対する直接・間接の種々注釈を通じて整備・展開を見たと言える。だが、「Mīmāṃsā は20章からなる」との証言が歴史上散見し、残りの4章をなすものとして Madhyama-Mīmāṃsā (MM)⁽⁵⁾たる Saṅkarsakānda (SK) が種々文献の伝えるところであり、さらにそれに対する後代の注釈までが添えられて現に出版されているという事情がある⁽⁶⁾。この些か謎めいたそして事実謎だらけの MM 乃至 SK についての総括的な考察が、Lariviere の論文の体をなしている。もとよりこの SK も昨日今日発見されたものではなく、既に百年の研究史を持っている。当然ながら多くの資料が報告され、研究論文も少なからず発表されている。むしろこの論文で Lariviere によってもたらされた新資料というものは皆無と言ってよいかもしい⁽⁷⁾。にも拘らず、今後この論文が Mīmāṃsā 研究に於て重宝されるだろうと思われる所以は、Lariviere によってこれまでの SK 研究がかなり要領よく纏められており、必ずしも常に正しい考察に貫かれていたとは言い難い諸研究の誤りと真実が弁別され、今後のさらなる研究にとっての種々問題点がかかりはっきりと整理・指摘されていることにあると思われる。事実、これを参照すれば、これまでの SK についての諸研究に勞せずして到達出来るし、その研究者が幸運に恵まれていさえすれば、直接手にとって独自の手続きを加えることにより先学が辿り着いた結論とは全く異なった、しかもより魅惑的な結論に到達することも可能である。だが、そうした経過を曲がりなりにも経て今本稿を草しつつある筆者の率直な感想を先ず述べるならば、SK をめぐって Lariviere 自身によってなされた作業は色々問題点を含みながらも、Parpola によってなされたものと同様、かなり堅固なもののように思われるのである。これを越える地点に辿り着くのはなかなか容易ではなく、今後は引き続き SK についての新たな歴史的証言の発見・累積と、従来の Mīmāṃsā 研究の土俵に止まらぬより広い見地からの研究⁽⁸⁾が必要であろうと実感される。従ってこの Lariviere 論文以降の研究はそれを出発点に据えて、より明確な堅固な歴史的展望を得るべくなされる筈である。本邦では、逸早く東北大の伊藤道哉氏によって小品ながらも「Saṅkarsa-

kāṇḍa について」⁽⁹⁾ が発表されている。そこで氏は、本邦では既に30年以上も前に、中村元博士によってかなり詳しく紹介され⁽¹⁰⁾ て以来久しく看過されていたこのSKを廻る研究の成果を簡潔に紹介すると共に、主として「ラーマヌジャ派の資料との関係を吟味」⁽¹¹⁾ している。

以上の如き Parpola, Lariviere, 伊藤氏等の諸研究を踏まえ、小論では主として Parpola, Lariviere の論文でそれぞれ問題として論じられた Mimāṃsā の組織に関わる「名称」の問題、即ち「Pūrva-Mimāṃsā, Uttara-Mimāṃsā」, 「Sāṅkarṣa-kāṇḍa」との「名称」に関わる諸問題を詮議することになるであろう。併せて若干の新資料(?)を報告し、Mimāṃsā の歴史的研究に於ける方法上の問題点についても少しく私見を述べてみたいと考える。

II Pūrva-Mimāṃsā, Uttara-Mimāṃsā について

Parpola は上記論文の冒頭で、一般に Karma-Mimāṃsā (=いわゆる Vedānta) と同義語として用いられる Pūrva-Mimāṃsā (PM), Uttara-Mimāṃsā (UM) という語中の Pūrva-, Uttara- という語が意味するところを問題にする。従来の種々解釈・意義づけ⁽¹²⁾ を考慮しつつそれを検討した結果、この Pūrva-, Uttara- の両語は、本来一つの全体としての Ur-MS があって、その前部 (Pūrva-K), 後部 (Uttara-K) を意味するものとして用いられるに到ったとの大胆な仮説を提出している。そしてさらに進めてミーマーンサー派の根本経典たるものとして屢々用いられる Pūrva-Mimāṃsā-sūtra (PMS) という語や、ヴェーダーンタ派の根本経典たる BrS (= Vedānta-sūtra = Śārīraka-sūtra) を意味しての Uttara-Mimāṃsā-sūtra (UMS) という語は、本来決して「前ミーマーンサー (PM) 派のストトラ」や、「後ミーマーンサー (UM) 派のストトラ」を意味したものではなく、「MS の前部としての P-MS」, 「MS の後部としての U-MS」を意味するものであったと主張する。だが実のところその議論は彼の論稿のうちにあつて、必ずしも適切なものとは見なし難いのである。

Parpolaによって提出された「PM, UM乃至 PMS, UMS という語は、本来一つの MS の前部、後部を意味するものであった」との主張は、仮りに「現行 MS, BrS に先立って一つの MS が著わされた」という仮説を受け入れたとしても、なお極めて疑わしいことのように思われる。それを明らかにすることが取敢えずの目的であるが、それに当たって先ずは、以下の三点を確認しておきたい。驚くべきことに従来の研究では、この PM, UM (or PMS, UMS or MS) という複合語の用例についての検討がなされておらず、従ってそれらの初出年代の詮議もなされていないのである⁽¹³⁾。

① PM, UM という語が文献に現われるのはかなり後代のことである(最古の用例を指摘出来ないまでも、恐らく AD. 10世紀頃以前には、そう遡ることは出来まい)。

② PMS, UMS の語が近・現代の学者達の研究論文中に極めて屢々用いられているのは事実であるが、研究対象となる歴史上の文献中には、ほとんどといってよい程見られない⁽¹⁴⁾(仮りにあるとしても、PM, UM という語に先立ってそれが用いられた例を指摘するのは困難であろう)。

③ Jaimini の著作に対して今日一般に用いられる MS との呼称も、歴史的に由緒のあるものとは見做し難い(この語の初出年代に関しても明確な考察は行われていないと考えられる。おそらくこの語は近代の学者により Jaimini のその著作を意味するものとして便宜的に導入されたものであろう)。

だが Parpola は “PMS would thus have originally meant “the former or first part of the Mīmāṃsāsūtra”, and UMS correspondingly “the latter or second part of the Mīmāṃsāsūtra”, not “the Sūtra of Pūrva-Mīmāṃsā/Uttara-Mīmāṃsā”. ”⁽¹⁵⁾ と主張しているのである。下線部からも明らかな通り、Parpola がここで主張しようとしているのは、PM, UM 乃至 PMS, UMS という語の本来の意味についてである。語の本来の意味を問おうとする時、当然ながらその語の最初の使用ということが前提とされている筈である。使用されてもいない語の本来の意味を付度することが不毛なことはいま

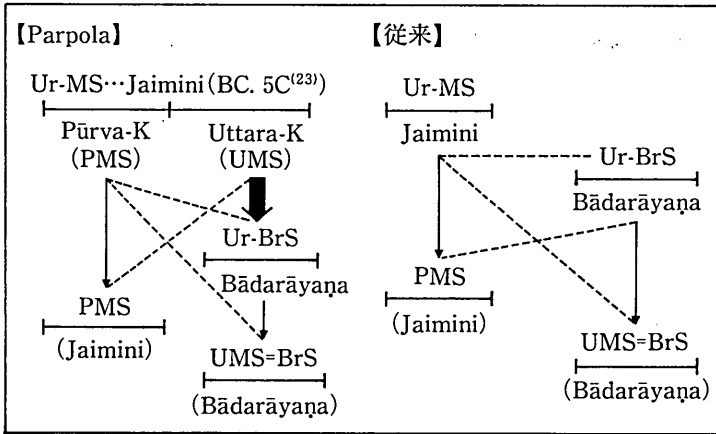
でもない。にも拘らず、驚くべきことに Parpola によってもまた、PM, UM 乃至 PMS, UMS の歴史上の用例に対する顧慮が一切払われていないのである（当然ながら、Jaimini の著作に対しての呼称として用いられる MS という語を歴史的に自明のものと考えている）。そしてただ、“I suspect that originally the terms PM and UM did not occur at all outside the book titles or rather headings PMS and UMS, ……”⁽¹⁶⁾ と言うばかりである。どうやら Parpola は、現存の種々文献中の PM, UM 乃至 PMS, UMS の具体的な用例に立ち入ることなく、只管当の PM, UM 乃至 PMS, UMS という語のかなり早い時期での使用を思い描いているようである。ここでいやくも Parpola によって問題とされているのは、Parpola が想像する現存 MS と BrS の成立の前提となる Ur-MS が Pūrva-K, Uttara-K との構成を持っていたか否かの議論とは全く別のものである。筆者が一応の目安として上に掲げた年代「AD. 10世紀頃」が、仮りに PM, UM 乃至 PMS, UMS という語の初期の使用時期を示すとすれば、Parpola の主張とは、AD. 10世紀頃に最初に PM, UM 乃至 PMS, UMS という語を用いた人のそれらの語に託した意味をめぐってのものとなろう。だが AD. 10世紀頃より屢々種々文献中に現われる、PM, UM の用例を具体的に検討するならば、Parpola の語義解釈を支持するものは皆無と言ってもよいのである。

こうした Parpola の語義解釈に際しての致命的とも言える方法上の不毛さ（つまり、originally を詮議しようというのに、全く歴史的ではない）を別にしても、Parpola がその両語に与えた解釈自体も、どうにも裏付けに乏しい、つまり、Parpola が問題にしている PMS, UMS という語が、本来 PM-S, UM-S というよりは、P-MS, U-MS と分解されて、“the former or first part of the Mimāṃsāsūtra”, “the latter or second part of the Mimāṃsāsūtra” を意味した筈だ、との解釈がである。Parpola 自身そのようなユニークな想像の一つの根拠と考えているらしい、Ur-MS の作者とされる Jaimini に縁のある *Sāma-veda* が Pūrva-ārcika, Uttara-ārcika との構成を持っている⁽¹⁷⁾ ことなども、この場合根拠にはなるまい。何故なら、Ur-

MS は Pūrva-K, Uttara-K との構成を持っていた、との Parpola の推定ではなく、今日普通に現存 MS, BrS を指示するものとして考えられている PMS, UMS という複合語に対する上記のような解釈こそを問題にしているためである。即ち Pūrva-K, Uttara-K という構成を持つ一つの全体としての MS の、Pūrva-K (前部), Uttara-K (後部) を意味するサンスクリット語の複合語として、PMS, UMS が果たして可能か、と問いたいのである。これに関する唯一つの拠り所は、Parpola 自身によって指摘されていないが、*Pāṇini-sūtra* II-2-1 “pūrvāparādhrottaram ekadeśinaikādhikaraṇe” 等に関して展開されるサンスクリット語文法上の議論⁽¹⁸⁾にあると思われる。pūrva-kāya, pūrva-ahna 等の語がそれぞれ “the fore-part or the upper part of the body”, “the earlier part of the day”⁽¹⁹⁾ との意味で用いられることがあるとの議論である（そこで PM, UM が実例として検討されることがないことは言うまでもない）。これを以ってすれば、M 乃至 MS という語が本来一つの全体 (ekadeśin) を意味するものであることを前提とした上で、PM (S), UM (S) という複合語に Parpola のような意味を持たせることはなんとか可能であるかもしれない⁽²⁰⁾。

この Parpola の解釈はいわば、*Sāma-veda* の Pūrva-ārcika, Uttara-ārcika を意味するものとして Pūrva-Sāma-veda, Uttara-Sāma-veda との複合語が文法的に可能であることを楯に、Pūrva-Sāma-veda, Uttara-Sāma-veda との複合語が、本来それぞれ *Sāma-veda* の、Pūrva-ārcika, Uttara-ārcika を意味するものとして用いられたと主張することと事実上同じことである。だが、紛れもなく一つの全体を意味する kāya, ahna といった語と、ひとつの著作の全体に対する名称(?)としての M (MS) という語を同等に扱ってよいものかどうか。また、Parpola がおそらく唯一真に有力な根拠と考えて引いている、*Jaiminiya Gṛhyasūtra* に対する Śrīnivāsadhvarin の注釈中の前半部末尾のコロホン：“……iti Jaiminisūtram pūrvam”⁽²¹⁾ (iti Pūrva-Jaiminisūtram ではない) も、本当に Parpola の推定を支持するものと言えるだろうか。はたしてインドに於て、

一つの作品の一部分を、作品名に Pūrva-, Uttara- という語を冠しての複合語で呼称することがあったらどうか。M 乃至 MS という語が作品の名称であることを前提としてのみ意味をもちうるこの Parpola の解釈が、文法学上の支持を得るためには、さらに幾つかの仮定を必要とすることであろう。



ここで Parpola の仮説を、従来の一般的説明と比較した形で図示してみよう（ただし便宜上 SK は考慮外におく）。絶対年代に関しては議論の余地があるものの、図中太い矢印こそが Parpola の構想の独自性を端的に示すものである。だが、こうして見てみると、その構想は Parpola の現実離れた PMS, UMS の語義解釈に依存するところ大であったように思われる。むしろ、Parpola は、後代の文献に屢々現われる PM(S), UM(S) という複合語の由来は他に求めて、ただ Ur-MS が Pūrva-K, Uttara-K という構成を持つものであり、Ur-BrS が、その Uttara-K に基づいて成立したと言えよかっただのである。そうしたからといってさほどの後退ではないように思われるが、「先行するものは後続するものに影響を与え得る」との常識に拠るならば、Parpola の仮説の意義は希薄になり⁽²²⁾。むしろ Parpola によって Ur-MS に対して推定されている絶対年代こそが真価を問われねばなるまい。それに関しては残念ながら本稿は全く無力であ

る。

本稿冒頭でも触れたように「Śārīraka (= BrS) も Jaimini が著わした」と解し得る Sureśvara の貴重な証言は、確かに Parpola の仮説を支持する唯一の積極的根拠である。だが、それとて Ur-BrS の作者を Bādarāyaṇa ではなく Jaimini とする根拠とはなり得ても、必ずしも Parpola の言う一連の纏まった作品としての Jaimini 作 Ur-MS を支持するものではないのである。この PMS, UMS の語義解釈と「現行 MS, BrS の成立の前提となる、一人の著者(= Jaimini)による Ur-MS が存在した」との仮説の、何れが先に Parpola によって構想されたかは、筆者には知る由もないが、前者がかなり長大なものとなりそうな論文の冒頭に置かれていることから、そのあたりの事情を察し得るように思われる。Parpola 自身の「Jaimini による Ur-MS」への肉付けとしての入り組んだ論述にとっても、この PMS, UMS は実に簡便な記号であり、それらの記号に対してさらに上記のような歴史的意義をも盛り込むことができるとすれば、その論述はこの上なく劇的なものとなった筈である。

一方、PMS, UMS を P-MS, U-MS のように分解するとすれば、それは複数の MS が考えられた場合の、それらを互いに区別する限定辞としての Pūrva-, Uttara- が付されたものと考えてのがサンスクリット語として自然であろう(つまり、kāṇḍa や ārcika の場合のようにである)。PMS, UMS という複合語は、複数の MS (作品名を表わす固有名詞としての MS ではなく、Mīmāṃsā の Sūtra としての MS) を相互に区別するべくして導入されたものであり、Parpola の言うような Jaimini による唯一つの MS という作品しかなかった(しかも、MS の呼称が定着を見ていなかった!)時代に於ては生まれ得なかったといっても差し支えないだろう。現に見られる PM, UM という語の歴史上の用例は端から悉くそれを支持するのである。

さて、以上の結果、AD. 10世紀頃よりインドの種々文献中に屢々現われる PM, UM (前述したように、PMS, UMS の形ではまず現れない)という語の本来の意味に対する Parpola の解釈の成立し難いことが判明した。

では、その両語を歴史の当事者達は一体どのように考え、使用していたかを以下に簡単に見てみよう⁽²⁴⁾。これを問うことは次に問題にする SK を廻る議論への大事な前提となる筈である。

Mīmāṃsā の組織を伝える資料は概ね、mīmāṃsā が、例えば *Yājñavalkya-smṛti* I-3 “purāṇanyāyamīmāṃsādharmasās-trāṅgamiśritāḥ/vedāḥ sthānāni vidyānāṃ dharmasya ca caturdaśa/”⁽²⁵⁾に見られる Veda の14学中に列挙されている事実の指摘に始まり、それに対する注釈 *Mitākṣarā* の記述：mīmāṃsā vedavākyavicārah⁽²⁶⁾の如く、「ヴェーダの文章の考察」との規定を基礎に据えた上で展開されている。言うまでもなく、こうした mīmāṃsā の規定は現存 MS に対する現存最古の注釈 Śabarasvāmin の Bhāṣya の “katham vedavākyānām anekavidho vicāra iha vartīyate”⁽²⁷⁾等の形で既に明確になっていたものである。あるいはまた、それは以下に引く i)にも明らかなように、「ヴェーダの文章の意味 (vākyārtha) の考察」としてもいいだろう。

i) tatra sāṅgopāṅgasya vedasya pūrvottarakāṅḍasaṃbhīn-
nasyāśeṣavākyārthavicāraparāyaṇaṃ mīmāṃsāsāstraṃ/tad
idaṃ viṃśatyadhyāyanibaddham/tatra ṣoḍaśādhyāyanibaddham
pūrvamīmāṃsāsāstraṃ pūrvakāṅḍasya dharmavicāraparāyaṇaṃ
Jaiminikṛtam/tadanyad-adhyāyacatuṣkam uttaramīmāṃsāsā-
stram uttarakāṅḍasya brahmvicāraparāyaṇaṃ Vyāsakṛtam/
tasya viṃśatyadhyāyanibaddhasya mīmāṃsāsāstrasya kṛta-
koṭīnāmadheyam bhāṣyam Bodhāyana kṛtam/tad granthābā-
hulyabhayād upekṣya kiñcit saṃkṣiptam Upavarṣeṇa kṛtam/tad
api mandamatīn prati duṣpratipādaṃ vistīrnatvād ity upekṣya
ṣoḍaśalakṣaṇapūrvamīmāṃsāsāstramātrasya Devasvāmīnātisaṃ-
kṣiptam kṛtam/Bhavadāsenāpi kṛtam Jaiminiyabhāṣyam/punar
dvikāṅde dharmamīmāṃsāsāstre pūrvasya tantrakāṅḍasyācārya-
Śabarasvāmīnātisaṃkṣeṇa saṅkarṣakāṅḍam dvitīyam upekṣya
kṛtam bhāṣyam/tathā devatākāṅḍasya Saṅkarṣeṇa/brahmakāṅ-
ḍasya BhagavatpādaBrahmadattaBhāskarādibhir matabhe-

- denāpi kṛtam/(PH, p. 38, 1. 14-p. 39, 1. 12)
- ii) viṁśatyadyāyayuktā sā pratipādyaṛthato dvidhā/karmārthā pūrvamīmāṃsā dvādaśadyāyavistr̥tā//17//asyaṃ sūtraṃ Jaiminiyaṃ Śābaram bhāṣyam asya tu/mīmāṃsāvārttikam Bhāṭṭam Bhaṭṭācāryakṛtam hi tat//18//…… bhavaty uttaramīmāṃsā tv aṣṭādhyāyī dvidhā ca sā/devatājñānakāṇḍābhyāṃ Vyāsasūtraṃ dvayoṣ samam//20//pūrvādhyāyacatuṣkena mantravācyātra devatā/Sāṅkaraṣaṇoditā tad dhi devatākāṇḍam ucyate//21// (SSS, pp. 2-3)
- iii) evaṃ pūrvottarakāṇḍātmanā bhinnasya vedasyādhyāyanavidhipariḡhitatvād vivakṣitārthatvena niścitasyaṛthavicārāya mīmāṃsāsāstraṃ pravṛttam/tac ca viṁśatyadyāyaparimitaṃ kāṇḍatrayātmakaṃ bhavati/tatra pūrvamīmāṃsā dvādaśādhyāyamitā karmakāṇḍaniṣṭhā/tatsūtrakarttā Jaiminih/…… uttaramīmāṃsā tu dvirūpā saguṇanirguṇabrahmaniṣṭhā aṣṭādhyāyamitā Vyāsapraṇitā/tatra saguṇabrahmaniṣṭhā devatākāṇḍātmikādhyāyacatuṣṭayavati/…… evaṃ madhyamamīmāṃsā sarvadevatātmano hareḥ pratipādiketi saguṇabrahmaparā bhavati/jñānakāṇḍātmikā tu nirguṇabrahmaniṣṭhā/sāpi caturādhyāyamitā/…… prati karmakāṇḍam pravṛttam/…… prati devatākāṇḍam pravṛttam/…… adhikṛtya brahmakāṇḍam pravṛttam ……/(SMS, pp. 10-11)
- iv) iha khalu sakalalokābhīṣṭapuruṣārthacatuṣṭayāvāptihetubhūtāni vedatadaṅgopāṅgopavedākhyaviśiṣṭāny aṣṭādaśa vidyāsthānāni ……/…… tatrādyāni caturdaśa vidyāsthānāni svata evādhyarhitataraprathamacaramapuruṣārthadvayapratipattyupāyatvena puruṣaṃ praty antaraṅgatvāt pradhānabhūtāni/itarāni tv itarapuruṣārthadvayāvagrahahetutvena bahiraṅgatvād apradhānabhūtāni/(JSAS, p. 2, 11.5-14)
- sā ceyam evamrūpā mīmāṃsā pūrvottararūpatvena dvaividhyaṃ bhajate/tatra pūrvapurūṣārthapratipattyabhyupāyabhūtā pūr-

vamimāṃsā, uttarapuruṣārthapratityarthā tūttaramimāṃsā/
(ibid., p. 3, 11.8-10)

v) evaṃ ca karmakāṇḍabrahmakāṇḍātmako vedo dharmārthakāmamokṣahetuḥ/(PBheda, p. 16, 11.6-7)

evaṃ mimāṃsāpi dvidihā karmamimāṃsā śārīrakamimāṃsā ca tatra dvādaśādhyāyī karmamimāṃsā … Jaiminīnā praṇītā/tathā saṃkarṣaṇakāṇḍam apy adhyāyacatuṣṭayātmakaṃ Jaiminīpraṇītaṃ tac ca devatākāṇḍasaṃjñayā prasiddham apy upāsanākyakarmapratipādakatvāt karmamimāṃsāntargatam eva//tathā caturadhyāyī śārīrakamimāṃsā … Bādarāyaṇena kṛtā/(ibid., p. 19, 11.3-15)

vi) mimāṃsā—“athāto dharmajijñāsā” ityādinā Jaiminīpraṇītā dvādaśādhyāyī saṃkarṣaṇakāṇḍātmikā caturadhyāyī ca karmamimāṃsā, “athāto brahmajijñāsā” ityādinā Vyāsapraṇītā caturadhyāyī śārīrakamimāṃsā ca// (PrA, p. 43, 11.29-32)

以下に図示したのものからも明らかなように, i), ii), iii), iv) に於て, PM, UM の語が用いられているが, それぞれ説明するところは微妙に異なっている。だが, 総じて言えることは, そうした mimāṃsā の PM, UM の二種の分類が, 考察の対象たる Veda の側の二種の違いに帰せられているという点である。

即ち, i)によれば P-MŚ, U-MŚ の区別は, 考察の対象たる Veda の Pūrva-K, Uttara-K の違い (ただし, Veda にあるこの Pūrva-K, Uttara-K が具体的に何を意味するかは今では問わない⁽²⁹⁾) によるものであり, ii)によればただ pratipādyārthato dvidihā とした上で PM, UM が導入されていて必ずしも明確ではないが, i)と同様に Veda の側の二種類に基づいて, mimāṃsā の PM, UM との二種類が説明されている。なお, 次の iii)と同様に PM, UM と PM の Sūtra, UM の Sūtra とが截然と区別されていて興味深い (明らかに, Parpola の解釈と反する!)。iii)によれば, i)の場合と同様に, 対象たる Veda の Pūrva-K, Uttara-K の違いに基づいて, さらに Uttara-K の内容たる brahman の二種 (saguṇa- と nirguṇa-) に基づいて, mimāṃsā に

| Veda | Mīmāṃsā(-Śāstra) | -kāra | | | | | | | | | | | | | | |
|---|--|-------|----|-------------------|-----------|---------------------|----------|-----------------------|----------|----------------------------------|-----|------------------|---|------------------|--|----------------------|
| i) <u>PH</u> (11C ^{?(28)}) Pūrva-K Uttara-K | <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%;"></td> <td style="text-align: right; border-bottom: 1px solid black;">20</td> </tr> <tr> <td>Pūrva-MŚ</td> <td style="text-align: right;">16</td> </tr> <tr> <td>Tantra-K</td> <td style="text-align: right;">(12)</td> </tr> <tr> <td>Sāṅkara-K</td> <td style="text-align: right;">(4)</td> </tr> <tr> <td>(Devatā-K)</td> <td></td> </tr> <tr> <td>Uttara-MŚ</td> <td style="text-align: right;">4</td> </tr> <tr> <td>Brahma-K</td> <td></td> </tr> </table> | | 20 | Pūrva-MŚ | 16 | Tantra-K | (12) | Sāṅkara-K | (4) | (Devatā-K) | | Uttara-MŚ | 4 | Brahma-K | | Jaimini Vyāsa |
| | 20 | | | | | | | | | | | | | | | |
| Pūrva-MŚ | 16 | | | | | | | | | | | | | | | |
| Tantra-K | (12) | | | | | | | | | | | | | | | |
| Sāṅkara-K | (4) | | | | | | | | | | | | | | | |
| (Devatā-K) | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Uttara-MŚ | 4 | | | | | | | | | | | | | | | |
| Brahma-K | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ii) <u>SSS</u> (?) ? karman- ? devatā- jñāna- | <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%;"></td> <td style="text-align: right; border-bottom: 1px solid black;">20</td> </tr> <tr> <td>Pūrva-M</td> <td style="text-align: right;">12 -Sūtra</td> </tr> <tr> <td>Uttara-M</td> <td style="text-align: right;">8 -Sūtra</td> </tr> <tr> <td>Devatā-K</td> <td style="text-align: right;">(4)</td> </tr> <tr> <td>Jñāna-K</td> <td style="text-align: right;">(4)</td> </tr> </table> | | 20 | Pūrva-M | 12 -Sūtra | Uttara-M | 8 -Sūtra | Devatā-K | (4) | Jñāna-K | (4) | Jaimini Vyāsa | | | | |
| | 20 | | | | | | | | | | | | | | | |
| Pūrva-M | 12 -Sūtra | | | | | | | | | | | | | | | |
| Uttara-M | 8 -Sūtra | | | | | | | | | | | | | | | |
| Devatā-K | (4) | | | | | | | | | | | | | | | |
| Jñāna-K | (4) | | | | | | | | | | | | | | | |
| iii) <u>SMS</u> (?) Pūrva-K Uttara-K brahma- | <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%;"></td> <td style="text-align: right; border-bottom: 1px solid black;">20</td> </tr> <tr> <td>Pūrva-M Karma-K12</td> <td style="text-align: right;">-Sūtra</td> </tr> <tr> <td>Madhyama-M Devatā-K</td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td style="text-align: right;">4 -Sūtra</td> </tr> <tr> <td>Uttara-M Jñāna-K 4</td> <td></td> </tr> <tr> <td>(Brahma-K)</td> <td></td> </tr> </table> | | 20 | Pūrva-M Karma-K12 | -Sūtra | Madhyama-M Devatā-K | | | 4 -Sūtra | Uttara-M Jñāna-K 4 | | (Brahma-K) | | Jaimini Vyāsa | | |
| | 20 | | | | | | | | | | | | | | | |
| Pūrva-M Karma-K12 | -Sūtra | | | | | | | | | | | | | | | |
| Madhyama-M Devatā-K | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 4 -Sūtra | | | | | | | | | | | | | | | |
| Uttara-M Jñāna-K 4 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| (Brahma-K) | | | | | | | | | | | | | | | | |
| iv) <u>JSAS</u> (16C) pūrva (dharma) uttara (mokṣa) | <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%;"></td> <td style="text-align: right; border-bottom: 1px solid black;">12</td> </tr> <tr> <td>Pūrva-M</td> <td></td> </tr> <tr> <td>Uttara-M</td> <td style="text-align: right;">4</td> </tr> </table> | | 12 | Pūrva-M | | Uttara-M | 4 | Jaimini Bādarāyaṇa | | | | | | | | |
| | 12 | | | | | | | | | | | | | | | |
| Pūrva-M | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Uttara-M | 4 | | | | | | | | | | | | | | | |
| v) <u>PBheda</u> (16-17C) Karma-K Brahma-K | <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%;"></td> <td style="text-align: right; border-bottom: 1px solid black;">12</td> </tr> <tr> <td>Karma-M</td> <td></td> </tr> <tr> <td>Saṅkara-K</td> <td style="text-align: right;">4</td> </tr> <tr> <td>Śārīraka-M</td> <td style="text-align: right;">4</td> </tr> </table> | | 12 | Karma-M | | Saṅkara-K | 4 | Śārīraka-M | 4 | Jaimini Jaimini Bādarāyaṇa | | | | | | |
| | 12 | | | | | | | | | | | | | | | |
| Karma-M | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Saṅkara-K | 4 | | | | | | | | | | | | | | | |
| Śārīraka-M | 4 | | | | | | | | | | | | | | | |
| vi) <u>PrA</u> (17C) | <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%;"></td> <td style="text-align: right; border-bottom: 1px solid black;">12</td> </tr> <tr> <td>Karma-M</td> <td></td> </tr> <tr> <td>Saṅkara-K</td> <td style="text-align: right;">4</td> </tr> <tr> <td>Śārīraka-M</td> <td style="text-align: right;">4</td> </tr> </table> | | 12 | Karma-M | | Saṅkara-K | 4 | Śārīraka-M | 4 | Jaimini Vyāsa | | | | | | |
| | 12 | | | | | | | | | | | | | | | |
| Karma-M | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Saṅkara-K | 4 | | | | | | | | | | | | | | | |
| Śārīraka-M | 4 | | | | | | | | | | | | | | | |

は PM, MM, UM の区別が立てられている。

iv) が PM, UM の意義づけに関して最もユニークなものである。Veda の内容を四種の *puruṣārtha*, 即ち *dharma*, *artha*, *kāma*, *mokṣa* に対応させ、その四つのうちの *artha*, *kāma* を除いた *dharma*, *mokṣa* という二者のうちの前の *puruṣārtha* (*pūrva-puruṣārtha*) = *dharma* を獲得する手段となるものが PM, 後の *puruṣārtha* (*uttara-puruṣārtha*) = *mokṣa* を獲得する手段となるものが UM と説明されている。この i), ii), iii), iv) の用例から以下の諸点が明らかになる。即ち、「ヴェーダの文章の考察」と規定される *mīmāṃsā* (-śāstra) という学問(の体系)は、その対象(X)によって、X'-*Mīmāṃsā* と呼称される。X'-*mīmāṃsā* は X (or X') に関する (or X' という) *mīmāṃsā* を意味する。そして X'-*Mīmāṃsā* (-Śāstra) は必ずしも X'-*Mīmāṃsā*-*Sūtra* を意味しない (-*Mīmāṃsā*-*Sūtra* は「作品」と直ちに結びつくが、前者は必ずしもそうではない)。また ii), iii) の作者にとって、PMS, UMS は PM の *Sūtra*, UM の *Sūtra* と明確に理解されていた。しかも筆者が①②として指摘する際に(04頁) PM, UM 両語の最も初期の用例に属するものとして思い描いていたのが、特に i) と ii) である。ii) は Śāṅkara に帰せられる作品であるが、真作であることが疑問視されている⁽³⁰⁾のものであり、i) と ii) は共に匿名の作品である。仮りに ii) をこれらのうちの最古のものと考えても、全て AD. 10世紀頃以前にそう遡るものではないだろう。X'-*mīmāṃsā*- の X' が、*pūrva*, *uttara* であるものは、それ以前には不思議にない⁽³¹⁾のである。もとより全ての文献を調べたわけではなく、また年代の決定し難いものも多数あり、確言はできない。だが、これまでこの PM, UM 乃至 PMS, UMS の初出年代が特に問題になったことがなかった(と思われるが)点は全く奇妙なことである。筆者の知り限り、それ以前のミーマーンサー派やヴェーダーンタ派の学匠達によっては、用いられなかった語である。

また、用例 i), ii), iii), v), vi) は、「*Mīmāṃsā* (-Śāstra) は、全20章である」との情報をもたらす。そして、i), ii), iii) に見られる「*Mīmāṃsā* は20章からなる」との証言もこれ以前、即ち AD. 10世

紀頃以前には絶えて文献中には見出すことが出来ないのである。さらに、付け加えておこなうならば、次節で問題となる当の SK が “Saṅkarṣe” との形のみならず、“Saṅkarṣaṇe” とのヴァリエーションや Saṅkarṣa (na)-kāṇḍa との明確な形で文献中に散見されるようになるのもこの時期に重なっているのである。こうしたことは全て偶然とは考え難い。それはともかく、ここでは以後の考察の為にも既に周知のことではあるが、何某かの全体の一部分を表わす kāṇḍa が mīmāṃsā (-śāstra) の側だけではなく、その対象たる Veda の側にも考えられていた、という点を確認しておきたい⁽³²⁾。

また時代は前三例から若干下るものの、iv), v), vi) について触れておこう。iv), vi) はミーマーンサー派の正統に連なる Ṛṣiputra Paremeśvara III と Śambhu Bhaṭṭa によるものであり、v) は Śaṅkara の学統を継ぐヴェーダーンタ派の Madhusūdana によるものである。v), vi) に於て、PM, UM の語が用いられていないことは、iv) に於て PM, UM 中の Pūrva-, Uttara- の語に対して i), ii), iii) とは全く異なった意義づけがなされていることと共に注目すべきであろう。彼等は自らが従事している筈の学問を執れも mīmāṃsā としてはいても、その相互の差違を、単なる対象の差違として記述しているのである。それに対して i), ii), iii) の記述は種々ある mīmāṃsā の一体性を強調する。そこに「20章」(viṃśatyadhya) との明記があることも、そのことを指示しているだろう。足して合計20になるのとは意味が違うのである。さらに、iv) は SK の4章には触れてさえない。これらのことはある意味で極めて自然なことのように思われる。ミーマーンサー派の正統を自認する(?)者自らが、自らの従事する学問、乃至自らが依拠する經典を他に従属する意味を持つ名称で、即ち、UM を前提とする意味での PM と呼ぶとは考えられないし、Kumārila や Prabhākara が黙殺した SK は自らの体系を祖述する為に不可欠のものであった筈はないからである。iv) の、こじつけとまで思われる Pūrva-, Uttara- の解釈はそうした自意識の自然の発露と見做すべきであろう。そもそも対で用いられる pūrva-, uttara- との限定辞は、それらが付された何某かの両

者を単に相互に区別するものではありえまい。孰れも他を前提とするものであっても、それぞれがそう名付けられることによって帯びてしまう価値には自ずと高下が生じてしまうのである(その端的な例として我々は *pūrva-pakṣa*, *uttara-pakṣa* を持っている)。以上のことから次のように言えるのではないか。Parpola の考える Ur-MS の *Pūrva-K* に基づいて成立したかもしれない現存 MS を自派の根本経典とするミーマーンサー派の内部からは、決して PM, UM との名称は生まれなかった筈である。従って、それは外部、即ちヴェーダータ派から、或いはさらに外部から来たものであろう、と。一方、ヴェーダータ派の学匠達にとって *dharma* 若しくは *karman* を対象としてある *mīmāṃsā* は、常に何某か *pūrva* と見なされるものであった。それは、Parpola の考える Ur-MS の *Uttara-K* に基づいて成立したかもしれない、しかも *Śāṅkara* 自身によっては *Vedānta-Mīmāṃsā-Śāstra* と規定される⁽³³⁾ BrS に対する *Śāṅkara-Bhāṣya* の冒頭に於て、既に明瞭に窺われる事実である⁽³⁴⁾。中村元博士は Parpola と同じく PM, UM という語中の *Pūrva*, *Uttara* の意味に関する考察の終わりを次のように結んでおられる。「しからは何故に「前」「後」といふ区別が附せられるのか、といふと、ヴェーダータ・ミーマーンサーは、祭事ミーマーンサーを前提として予想しているからである。祭事ミーマーンサーは必ずしもヴェーダータ・ミーマーンサーを予想せずとも成立し得るが、これに反してヴェーダータ・ミーマーンサーは最初から祭事ミーマーンサーを前提として予想している。このことは、ブラフマ・スートラ第三編第三章においては特にはっきりしている。両者はこの意味において前後の関係をなして結合しているのである⁽³⁵⁾。」*Śāṅkara* 以後、おそらくミーマーンサー派の外部で *Mīmāṃsā* を一体のものとする機運が高まりを見せる AD. 10世紀頃より文献上に現われてくる PM, UM の語を最初に用いた者の脳裡には、Parpola が考える *Pūrva-K*, *Uttara-K* との構成を持った Ur-MS に関する伝承などではなく、むしろこうした経緯があったと思われるのである。ミーマーンサー派の *Kumārila* は自らの立場を *Pūrva-*

との限定辞を付した言葉では決して呼ぶことはなく、誇らかに“mīmāṃsākyā tu vidyeyaṃ bahuvidyāntarāśritā”⁽³⁶⁾と宣言している。

ところで、SKに論を移す前に「Mīmāṃsāは20章からなる」との証言について触れておく必要がある。先に述べた如く、こうした証言はi), ii), iii)に現われるものであり、それ以前の文献中には見出し得ないものである。この他に、かなり時代を遡るものとしては、RāmānujaによってVṛttikāraの言として引かれる“saṃhitam etac chārīrakam Jaiminiyena śoḍaśalakṣaṇeneti śāstrai katvasiddhiḥ”⁽³⁷⁾という貴重な証言がある。それ以後屢々それについての引用・言及が現われるが、それによってこのVṛttikāraがBodhāyanaと知られる。このMīmāṃsāのśāstraとしての一体性を証するVṛttikāraの言は、Mīmāṃsāが $16+(4)=20$ となり、しかも $16-12=4$ を担うものとしてのSKがJaiminiによるものである、との推定に対する一つの拠り所となる。中村博士によりAD. 10世紀頃と推定されている⁽³⁸⁾もののBodhāyanaの年代は必ずしも明確ではない⁽³⁹⁾。また、こうしたMīmāṃsāが全20章であるとの文献上の種々証言は、AD. 999年に比定される年代をもつ碑文の発見によっても裏付けられている⁽⁴⁰⁾。だがここでは、それがインド社会一般に普遍的に承認されるものではなく、一つの見方であるという事実を忘れてはなるまい。はからずも、上引Vṛttikāraの言は、当時16章からなるJaiminiによる「作品」がŚārīrakaと一体であるとの見方が絶対ではなかったこと、Sureśvaraの証言⁽⁴¹⁾に反してVṛttikāraにとってはŚārīrakaがJaiminiによるものではなかったことを証しているであろう。そうしたMīmāṃsāが全20章であるとの一つの見方がいかなる伝統の中で、いかなる社会の中で育まれるにいたったかと問うことを怠ってはならないのである。しかもその全20章であることが、必ずしも20章からなる一連の「作品」Ur-MSの存在を保証するものでないことは、先にも指摘したことである。

III Saṅkarṣa-kāṇḍa について

今日、Saṅkarṣa-kāṇḍa (SK) 研究は極めて複雑な様相を呈する筈である。Devasvāmin, Bhāskararāya の注釈と共に現に刊行されている SK の内容についての研究に止まる限りはまだいい。だが、一度それに関する「名称」「作者」「注釈者」「思想史的位置づけ」等に手を着けるならば、思いがけぬ種々困難に逢着することになる。つまり、研究者自身、往々にして SK という語の意味を明確にし得ないままに、或いは自分が何について論述を行っているかを把握し得ないままに自らの論述を進めかねないということである。

古くは PMS に対する Śabarasvāmin の Bhāṣya において現行 SK 中のスートラが二度までも “Saṅkarṣe” との言及と共に引用されている⁽⁴²⁾ことは、まさしくこの現行 SK の真正性を保証するものである。その上あの Śaṅkara も BrS III-3-43 の注釈中で、“Saṅkarṣe” との語と共に現行 SK 中の別のスートラを一つ引用している⁽⁴³⁾。従って、現存 Śabara-Bhāṣya や Śaṅkara-Bhāṣya 中のその箇所が後人による挿入でなかったとすれば、Śabara や Śaṅkara の著作を通じて自らの思想を育んだ筈の、それらに後続する、それぞれミーマーンサー派やヴェーダーンタ派の学匠達は当然、その “Saṅkarṣe” やそれと共にある引用を目にしていた筈である。だが Śabara の学統にあっては、多く黙殺された観がある⁽⁴⁴⁾。それに対して Śaṅkara の学統では、同一のスートラがかなり律義に反復・引用され⁽⁴⁵⁾、その出典名たる “Saṅkarṣe” に若干の注釈が施されている場合すらある。これに関しては、Śaṅkara とは異なった Viśiṣṭādvaita の立場から BrS に対して Śrī-Bhāṣya を著わした Rāmānuja も Śaṅkara と同じ箇所⁽⁴⁶⁾、“Saṅkarṣaṇe” との言及と共に、同一のスートラを引用している。こうした引用を初めとして、これまでにこれらの三スートラ以外にも現行 SK 中のスートラがその他の文献よりかなりの数が回収されている⁽⁴⁷⁾。これらの文献の作者達は孰れも現行のものと同じ著作と考えていい SK を実際に手にするか、それについてのかかなり正しい知識を持っていたと考えて

よいだろう。従って今日 SK 研究は一つにはそれらの著作が伝えるところに基づいて展開される筈である。そしてこの SK に関する「名称」「作者」「注釈者」「思想的な位置付け」が問われ、明確にされねばならないと思われるのである。

だが、そうした希求に対しては、現行 SK の真正性を直接に保証する、即ち現行 SK 中のストラを引用するそれらといえども、必ずしも役にたってくれないようである。無論 SK についてのこれら種々問題を解明する資料は上記のものに限られることはない。現にその他にも多くの資料が見出され、報告され、考察されているのである⁽⁴⁸⁾。それらのうち SK に関してこれまで最も豊かな情報を提供してくれたのが、前節の i) にも引いた匿名の作品 *Prapañcahydaya* (PH)⁽⁴⁹⁾ である。そこには *Mīmāṃsā* の組織の大綱と共に SK についての位置付け、作者、諸注釈者、内容に関して簡潔な記述がなされている。これまでの何某か *Mīmāṃsā* の歴史についての論述をなそうとする研究者でこの書の恩恵を被らなかつたものはなかつたと言えるのである。また、ii), iii) に引いた *Sarvasiddhāntasaṃgraha* (SSS) と *Sarvamataṣaṃgraha* (SMS) も貴重な情報源となっている⁽⁵⁰⁾。

Lariviere の “In any case the designations saṅkarṣa, or saṅkarṣaṇa, devatā, and upāsana seem to have been interchangeable in various texts. Whether or not all these designations referred to the same set of Sūtras is another question.”⁽⁵¹⁾ との記述中の問いを検討することが、本節の主たる課題である。つまり、同一の著作（乃至作品の一部）を指すかの如く種々文献中に言及される (“interchangeable” に見える) SK, Saṅkarṣaṇa-K, Devatā-K, Upāsana-K が、本当に全て同一の著作（乃至作品の一部）を指示するのか否かという問題である。従って、様々に記されるこうした伝承の真偽を弁別する手段を講じようということである。

これまでの資料によってさえ、筆者は現行 SK とは別の SK 乃至 Saṅkarṣaṇa-K 乃至 Devatā-K 乃至 Upāsana-K と呼ばれる著作が確かに存在した、と考えるべきであろうと思っている。SK について

の記述を残している当の人物がその現物を目にしないまま、その著作に関して誤って伝えることがあったかもしれないという点を考慮した上でなお、今日 SK についての重要な情報をもたらしてくれる PH, SMS の匿名の作者の念頭にある SK は現行 SK とは別のものであると考えることが出来る。いずれも現行 SK 同様 SK を 4 章からなるものとしている。i) は、注釈者として Devasvāmin を挙げることによって自らの記述の真正性を明かしてはいるものの、その二書が 4 章の内容をほぼ同じように概説しているのを見ると現行 SK とは別のものと考えた方がむしろ自然であろう(それとも、Devasvāmin のとは全く立場を異にする注釈、乃至解釈に基づくものと考えるべきか)⁽⁵²⁾。

また、Lariviere が注目している⁽⁵³⁾ものであるが、Madhva の *Anuvyākhyāna* 中に “Deva-śāstra” の呼称と共に “sa viṣṇur āha hi” という形で引用されている著作がある⁽⁵⁴⁾。そのテキストの編・訳者たる S. Siauve 並びにそれに注目した Lariviere のコメントから判断するに、それに対する注釈者 Jayatīrtha によれば(筆者未見)、その Deva-śāstra は、“athāto daiṇi (-jijñāsā?)” で始まり、“sa viṣṇur āha hi” に続いて “taṃ brahmety ācakṣate” をもって終わるものらしい⁽⁵⁵⁾。この三つのスートラは現行 SK には見出されないものである。だが、この三スートラ中後二スートラについては SK² の編者 K. V. Sarma によって明確に報告がなされている⁽⁵⁶⁾。Sarma によれば、その二スートラに先立ってさらにもう一つのスートラ “ante harau taddarśanāt” があったことが知られる。Sarma は当然ながらそれに “The authenticity of this and the next two sūtras as to whether they really belong to the ‘present’ Śaṅkarṣa Kāṇḍa is doubtful.”⁽⁵⁷⁾ とコメントしている。だが、その Sarma の指摘に通じている筈の Lariviere は上記 Siauve 本中の記述に注目してコメントしたにも拘らず、Sarma の指摘と突き合わせようとしていない。さらに、これに関しては伊藤氏も言及している。「また、彼 (= Vedāntadeśika: 筆者註) は *Satadūṣaṇī*, p. 15¹⁻², *Tattvaṭīkā*, p. 44⁹⁻¹¹ で現存 S.K. に見られない三つのスートラが、本篇 (= S.K.: 筆者註)

の upasaṃhāra にあったとする。最後のスートラ “taṃ brahmety ācakṣate” は、*Brahmasūtra* の最初のスートラと極めて滑らかに連続しそうだが、Pūrva, Uttara 両 mīmāṃsā を Kabandha-, Rāhu-mīmāṃsā (*Adhikaraṇasārāvali* p. 24⁸⁻¹¹, *Paramatabhaṅga* II. pp. 245-246) と呼んで、その一体性を重視した、彼 (= Vedāntadeśika: 筆者註) の挿入か否かは、今後の精査を期することとする⁽⁵⁸⁾と。ここで伊藤氏が言う三つのスートラとは、先に挙げた “ante harau taddarśanāt” “sa viṣṇur āha hi” “taṃ brahmety ācakṣate” のことである。Vedāntadeśika 自身の言葉を引くならば、“evaṃ tarkite karmaṇi saṅkarṣaṇakāṇḍe caturlakṣaṇyā tattatkarmārādhyadevataiva svarūpabhedaguṇaprakarṣaiḥ nirākṛṣyata/tat-samāptau ca, “ante harau taddarśanāt”, “sa viṣṇur āha hi”, “taṃ brahmety ācakṣate taṃ brahmety ācakṣate” iti vicārayiṣyamāṇam upacikṣya (upakṣipyata) iti tattvavṛddhāḥ/”⁽⁵⁹⁾となる。伊藤氏も Lariviere のコメントに注意を払わなかったと見え、Sarma と同じ事態に直面して「彼の挿入か否かは、今後の精査を期することとする」と簡単に結んでいる⁽⁶⁰⁾。Lariviere, Sarma, 伊藤氏の三者三様の反応が興味深い。Lariviere は、Devatā-K とも呼称される SK との関わりで、Deva-śāstra との著作に興味を示し、伊藤氏は Vedāntadeśika の記述中の Saṅkarṣaṇa-K (即ち、上記三スートラ) を直ちに現行 SK と直結している。ここから読み取らねばならぬのは、上記四スートラを含み、Madhva により Deva-śāstra と呼称された著作が、Vedāntadeśika によって、やはり Saṅkarṣaṇa-K という名称に結び付けられているということであろう。Jayatīrtha によれば、明らかに daivī を主題にした、しかも brahman の考察に直結しそうな、さらに現行 SK とは全く異なった Devatā-K 若しくは Saṅkarṣaṇa-K と呼称し得る作品が存在したと考えてよいように思われる。athāto で始まり、同じフレーズを二度繰り返して終わる Deva-śāstra という著作、これは今の所、僅かに四スートラしか回収されないが、確かに存在したと考えてよいのではないか (それとも、あくまでもこの四スートラ全てを含む現行 SK の別のバージョンの存

在を想定すべきか)⁽⁶¹⁾。PH, SMS がその内容の梗概を伝える SK, Devatā-K とは現存 SK ではなく、むしろこの Deva-śāstra にこそ相応しいかもしれない。特に SMS 中の “sarvadevatātmano hareḥ pratipādiketi saguṇābrahmaparā bhavati”⁽⁶²⁾ との説明は、この四ストラと見事に調和するように思われる。さらに付け加えるならば、数多くの著作を通じて今日 SK, Saṅkarṣaṇa-K 等についての貴重な情報を与える Vedāntadeśika の著作からただ一つの現行 SK 中のストラも回収されない事実⁽⁶³⁾は、Vedāntadeśika は現行 SK を直接目にすることがなかったことを証しているのであろうし、上記 Deva-śāstra すら又聞きで終わった可能性がある。彼の著作中には Saṅkarṣa⁽⁶⁴⁾, Saṅkarṣaṇa-K⁽⁶⁵⁾ との表現が併存しているし、それらと関連しそうな Saṅkarṣaṇa-Saṃhitā⁽⁶⁶⁾, Sāṅkarṣaṇa⁽⁶⁷⁾ との著作からの引用も見られる。これらは全て同一の著作を意味しているのか否かとの疑問に答ええないでは Vedāntadeśika の SK についての種々証言を現行 SK 研究の中に取り込むことが出来ない筈である。

さらにまた、Larivière が伝える⁽⁶⁸⁾ものであるが、Utpalācārya の *Spandaprādīpikā* 中の引用句の出典を表わすものとして “Saṅkarṣaṇasūtreṣu” と言及される著作がある⁽⁶⁹⁾。その四詩節はやはり現行 SK 中には見られないものである。Larivière はただ “These Śloka make poor Sūtras”⁽⁷⁰⁾ とコメントしているだけである。だが K. V. Sarma の引く “‘kratvaṅgatvaṃ vā cityetvaṅge nopapadyate’ (SK I i 15) iti Saṅkarṣaṇasūtram tu kratvapūrvopayogābhīprāyaṃ vyākhyeyam/”⁽⁷¹⁾ に明らかな通り、*Bhāṭṭadīpikā* 中では現行 SK 中のストラが Saṅkarṣaṇasūtra と呼ばれている事実を考慮するならば、ここにもやはり SK と呼び得るもう一つの著作⁽⁷²⁾が存在したことが確実である。

Kālidāsa 作 *Abhijñānaśakuntala* の注釈者として知られる Rāghavabhaṭṭa (AD. 15C) は *Sāradātīlaka* に対する註釈 *Padārthadarsa* (PA) の冒頭でまた次のような記述を与えている。これは、これまでの SK 研究に於ては報告されていないものである。

vii) tatra sarvāsu śrutiṣu kāṇḍatrayaṃ karmopāsanābrahamab-

hedena/tatra karmakāṇḍam Jaiminiprabhṛtibhiḥ samyaktayā
 vivṛtam/idam upāsanākāṇḍam Nārādādibhiḥ, brahmakāṇḍam
 bhagavadVyāsādibhir iti smṛ(śru)timūlakatā asya pratyak-
 ṣopalabdhā/…… tatra karmakāṇḍe sarvau'py adhikāri/mumuk-
 ṣor api tattvajñānaparyantaṃ svacittaśuddhyarthaṃ
 pratyavāyaparihārārthaṃ ca karmakaraṇe'dhikārasambhavāt/
 tadvad upāsanākāṇḍe pi/yātaḥ sākāropāsanātaḥ svargādi bahu
 phalaṃ bhavati kramato muktiś ca, karmakāṇḍāt tu svargādi-
 phalaṃ bahutaravyayā' yāsenā bhavati/brahmakāṇḍān muktir
 api ādaranaistaryadirghakālābhyāsaśādhya' nekeṣu janmasu
 tādr̥ṣeṣy eva gateṣu bhavati/"anekajanmasamsiddhāntato yāti
 parāṃ gatim" iti vacanād ata etad upāsanākāṇḍam
 evāgamaśāstrātmakaṃ gariya iti siddham/(PA, p. 1, 1.34-p. 2, 1.
 11)

こうした記述を一瞥すると、LariviereのようにSK研究に親しん
 でいる者なら直ちに、ここでUpāsanā-Kと呼ばれているものが例
 のSKを指すと考えるだろうし、そこで簡単に与えられている
 Upāsanā-Kについての説明を、直ちに現行SKについてのものと考
 えるに違いない。そして、SKの作者の問題にさらに新たな謎が加わ
 ったと判断することであろう。Lariviereの論文に集約される従来
 の研究ではSKを、Jaimini, Vyāsa, Kāśakṛtsna, Sāṅkara(ṇa)等
 に帰す諸説が検討されている⁽⁷³⁾。そしてLariviereは何一つ明確な
 根拠を示すことなく“it seems unlikely that Kāśakṛtsna should be
 considered the author of the SK”⁽⁷⁴⁾とKāśakṛtsna説を退け、何
 よりも現行SKの注釈者たるDevasvāminの権威によって“it
 seems reasonable to proceed on the assumption that Jaimini was
 indeed the author of the SK”⁽⁷⁵⁾とする。伊藤氏になると「著者を
 Jaimini, Vyāsa, Kāśakṛtsnaとする説がそれぞれ行われたが、無論
 三人のうちの誰かがS.K.を編んだと考えることは到底できない。や
 はり、*Jaiminisūtra*以降、そう遠く隔たらない時期に、ミーマーン
 サー学派によって編纂されたのであろう。』⁽⁷⁶⁾との穏当かつ不明瞭

な説明で満足する。これに対して今の記述は、Upāsanā-K (= SK?) の作者が Nārada であるとの説を伝えている。この Nārada とは如何なる人物か。例えば、Śambhu Bhaṭṭa により “evaṃ vaiṣṇavaṃ Nārādādibhiḥ kṛtam”⁽⁷⁷⁾ と明確に記された Nārada と同一の者と 考えてよいのか。Nārada-Smṛti の研究者でもある Lariviere なら、直ちに “it seems unlikely that Nārada should be considered the author of the SK” と言うことであろう。こうした記述はやはり、現物を目にしたことの無い著者の誤った伝承に基づくものと考え べきなのか。だが、この PA の編者 Sri Mukunda Jha Bkashi (Vakhsi?) はその序文 (Bhūmikā) で、こともなげに次のように当の 部分をパラフレーズしている。“…… yatra karmakāṇḍaṃ pūrvamīmāṃsādau, Jaiminyādibhiḥ/upāsanākāṇḍaṃ ca pañcar- ātrādau Nārādādibhiḥ jñānakāṇḍaṃ cottaramīmāṃsāyāṃ Vyāsādibhir upavarṇitam/”⁽⁷⁸⁾ 即ち「Karma-K は Jaimini 等によ り PM 等において、Upāsanā-K は Nārada 等により Pañcarātra 等 において、Jñāna-K は Vyāsa 等により UM において説示された」と である。これに明らかな通り、実のところ上記の記述は Upāsanā-K と呼ばれることもある SK という著作についてのもではなく、 Veda の Upāsanā-K に関して成立する Pañcarātra 派等 (= Vaiṣṇava) を主導する者としての Nārada を意味すると見るべきで あったのである。だが、だからといってこれを直ちに SK と無関係な ものとして退けることは出来まい。Veda がその内容から、Karma- K, Upāsanā-K, Jñāna-K (or Brahma-K) と三分され、そのそれぞ れが Jaimini, Nārada, Vyāsa によって説示されていると説くので ある。前節に於ける iv) を除く他の用例の記述は、全て実質的にはこ こでの用例と同じ構造を持っている。ただ Mīmāṃsā の対象たる Veda の分割の仕方が異なり、Pañcarātra と SK が違うだけであ る。ここからも、直ちに Pañcarātra = SK を機械的に導き出し得る。 Veda の Upāsanā-K に対する Nārada 等の物した「学問体系」乃至 「作品」に対して SK とか、MM との呼称は与えられていないとし ても、いわばこれも Mīmāṃsā に対する一つの見方である。この、

考察の対象としての Veda に対する Karma-K, Upāsanā-K, Jñāna-K との三分法はこの用例に限らず、他の文献中にも屢々見られるものである⁽⁷⁹⁾。SK が、時に Upāsanā-K との名称で呼ばれることとの関連で注意すべき点であろう。

またここで Upāsanā-K に関連して Pañcarātra の名前が出てきたことも、単なる偶然とは言えないだろう。というのも Pañcarātra もまた、今日その有名な 4 vyūha 説⁽⁸⁰⁾ 中の一 Saṅkarṣaṇa⁽⁸¹⁾ (Saṅkarṣa ではない) の名前抜きには語れぬものであるからである。Upāsanā-K との関連で、屢々 Saṅkarṣaṇa-K とも表現される SK に関連しそうな Pañcarātra が浮かび上がってきた。では、Madhyama-Mīmāṃsā たる現存 SK と Pañcarātra でいう Saṅkarṣaṇa とは何か関わりがあるのであろうか⁽⁸²⁾。Saṅkarṣa と Saṅkarṣaṇa との間でさえ混同があったとしても全然不思議でないにも拘らず、極めて不思議なことに、これまで SK 研究においてその Saṅkarṣa 乃至 Saṅkarṣaṇa と Pañcarātra の Saṅkarṣaṇa が結び付けられることは全くといってよい程になかったのである。SK、或いは SK についての伝承が、屢々ヴィシュヌ教と深い関わりを持つものであったことが容易に想像された⁽⁸³⁾にも拘らずである。SK に対する名称中の Saṅkarṣa 乃至 Saṅkarṣaṇa の意味がいまひとつ分明でない、即ち、例えば Śaṅkara の学統を引く Ānandagiri の “saṅkarṣyate karmakāṇḍastham evāvaśiṣṭaṃ karma saṅkṣipyocyate iti saṅkarṣo devatākāṇḍam”⁽⁸⁴⁾ に明らかなようにその kāṇḍa の性格を表わす単なる普通名詞であるか、Jaimini や Śaṅkara のような人物名であるか、或いはまた、当の SK は Saṅkarṣa-K⁽⁸⁵⁾ というのが本来の名称であるのか、それとも Saṅkarṣaṇa-K というのが適当であるのか、それすら確定し得ていないにも拘らずである。事実 Ānandagiri 等⁽⁸⁶⁾ のように SK の Saṅkarṣa を意義づける者に対して、その名前の由来を注釈者の名前、作者の名前に帰す者もまたいるのである。PH は名称を Saṅkarṣa-K とし、Jaimini に帰すものの、その注釈を Saṅkarṣa 乃至 Saṅkarṣaṇa が書いたとしている⁽⁸⁷⁾。また、それに対して一層明瞭に Saṅkarṣa が注釈者であ

ることを証言しているのが、SMS である⁽⁸⁸⁾。さらにまた、先に見た SSS は Devatā-K を UM に位置付けている点⁽⁸⁹⁾で SMS と同様特異なものと言える⁽⁹⁰⁾が、その作者に関しても一風変わった証言を与えている。Lariviere の言を借りるならば “it ascribes the authorship to Saṅkarṣaṇa via Vyāsa”⁽⁹¹⁾ ということになる⁽⁹²⁾。ここに見られる Saṅkarṣaṇa → Vyāsa という ācāryapāraṃparyā は何処から生じたものであるか。それに関しては例えば、“Brahmā Maheśvarāya Maheśvaraḥ Saṅkarṣaṇāya Saṅkarṣaṇo Nārādāya Nārado Vyāsāya Vyāso lokebhyaḥ prāyacchad iti ……”⁽⁹³⁾ といったヴィシュヌ教の内部に培われた一伝承との関係で検討する必要があるだろう。この伝承を前提にした上で、SMS や SSS のように SK を Vyāsa (= Bādarāyaṇa)⁽⁹⁴⁾ 作の UM の中に位置付けるならば、SK の成立を Saṅkarṣaṇa に帰そうが、Nārada に帰そうが、Vyāsa に帰そうが少しも不思議なことではなくなる筈である。また Lariviere によって逸早く予告・検討され⁽⁹⁵⁾、次いで直ちに P. Olivelle によって訳・註付きで発表された⁽⁹⁶⁾新発見のテキスト *Praṇava-mīmāṃsā* に次のようにある。“…… kramamukti-phaladātṛSaṅkarṣaṇācāryapraṇītopāsanākāṇḍam ……”⁽⁹⁷⁾ これに関して Lariviere はコメントして “…… the SK is not mentioned by that name, but is called the upāsanākāṇḍa.”⁽⁹⁸⁾ と言う。しかしながらこの資料は Saṅkarṣa(ṇa)-K ではなく、Upāsanā-K が Saṅkarṣaṇācārya (しかも Saṅkarṣaṇa ではない) によって著わされたと伝えるものである。この部分に窺われる Upāsanā-K を特徴づけるものたる krama-mukti を先に引いた vii) 中の Upāsanā-K の一つの特徴づけたる “kramato muktis” と比較してみてもいいだろう。確かに vii) では Saṅkarṣaṇācārya ではなく、Nārada の名前が挙げられてはいた。だが、先に述べたカラクリを想起するならば、即ちヴィシュヌ教の祖師の一系譜：… → Saṅkarṣaṇa → Nārada → Vyāsa を考慮するならば、Lariviere によって SK に関する新資料として召喚された *Praṇava-mīmāṃsā* の記述が、現行 SK に対してよりも、むしろ vii) の記述に沿うものと言えるのである。

以上の考察によって、これまで全て現行 SK に引き付けて検討されてきた観のある、SK 乃至 Saṅkara-K 乃至 Upāsanā-K についての様々な伝承が、必ずしも同一の現行 SK をめぐってのものではないこと、従ってそれらの全てを現行 SK を直接目にするものなかつた者の誤った伝承の所産と考えて済ますわけにもいかないだろうことが、ほぼ明らかになったことと考える。現行 SK 以上に(?) Saṅkara-K, Devatā-K, Upāsanā-K との呼称に相応しい、現行 SK とは別の著作についてはまた新たな論題の下で、検討される筈である。

註

金沢

- (1) 本稿では、「ミーマーンサー派」「ヴェーダーンタ派」との呼称はそれぞれいわゆる MS, BrS を根本經典として自らの哲学体系を展開した学匠達を総称するものとして便宜的に用いられる。
- (2) WZKS, Bd. 25, 1981, pp. 143~177. (以下 Parpola 1981 と略記)
- (3) “yato na Jaiminer ayam abhiprāya āmnāyaḥ sarva eva kriyārtha iti/yadi hy ayam abhiprāyo ’bhaviṣyat “athāto brahmajijñāsā/janmādy asya yataḥ” ity evamādibrahmavastusvarūpamātrayāthātmyaparakāśanaparaṃ gambhīranyāyasaṃdr̥bdham sarvavedāntārthamīmāṃsanaṃ śrīmacchārirakaṃ nāsūtrayīṣyat/” (NSi, p. 52, ll.2~6) Cf. Parpola 1981, p. 150, ll. 27~35. なおこの Sureśvara の記述に対する従来の解釈については、中村元『ブラフマ・ストラの哲学』東京 1981 (一刷 1951), pp. 42~44 等参照。
- (4) WZKS, Bd. 25, 1981, pp. 179~194.
- (5) 後出引用 iii)。Cf. Lariviere, op. cit., p. 180, n. 5. 註(7)参照。
- (6) SK¹, SK², SK³. SK¹ は Bhāskararāya (AD. 18C) の注釈 *Bhāttacandrikā* 付き, SK² は不完全ながらも唯一の Sūtra だけの写本に拠るもの, SK³ は, Devasvāmin (AD. 11C?) の注釈付きである。Devasvāmin については確定的なことは知られていない。Cf. Lariviere, op. cit., pp. 189~190, P. K. Aithal, “Devasvāmin: A forgotten jurist?”, *Indology and law*, Wiesbaden, 1982, pp. 106~119.
- (7) SMS 中の記述を検討したこと, P. Olivelle 発見の *Praṇavamīmāṃsā* (註90参照) を逸早く検討したこと等は Lariviere の功績であろう。

- (8) Mīmāṃsā の成立・展開と例えば *Mahābhārata* のそれとの関わり
の解明が待たれる。Cf. Asko Parpola, “On the Jaiminiya and Vādhūla
Traditions of South India and the Pāṇḍu/Pāṇḍava Problem”, SO 55:
22, Helsinki, 1984, pp. 1~42. (以下 Parpola 1984 と略記)
- (9) 『論集』11号, 仙台, 1984, pp. 174~175. 伊藤氏のこの論稿の元にな
った東北印度学宗教学会での発表の際に配布されたと思われる「資料」
を本稿執筆中に氏より御恵送いただいたが、それは謂わば「SK 資料集」
と言うべきもので、思うように資料を実見出来ない者にとって非常に便
利なものと言える。この他にも筆者は本研究に関連して、特に資料蒐集
に関して氏には一方ならぬお世話になった。記して甚深の謝意を表した
い。
- (10) 中村前掲書 pp. 35~42.
- (11) 伊藤前掲論文 p. 174, 上 11. 12~13.
- (12) Cf. Parpola 1981, pp. 145~147.
- (13) 一方、従来の Mīmāṃsā の歴史研究にあつては、mīmāṃsā という語
の歴史上の用例についての検討だけは積極的に行われている。Cf. S.
Sankaranarayanan, “Mīmāṃsā in Ancient India”, ABORI 62, 1981,
pp. 1~15.
- (14) 一方、PM-Śāstra, UM-Śāstra との語は AD. 10C 頃以降の文献には
散見する。
- (15) Parpola 1981, p. 148, ll. 8~12.
- (16) *ibid.*, p. 148, ll. 2~4.
- (17) *ibid.*, p. 148, 1. 13f.
- (18) Cf. KV, Part II, p. 89ff, etc.
- (19) Prin. Vaman Shivaram Apte, *The Practical Sanskrit-English
Dictionary* (Revised & Enlarged Edition), Kyoto, 1978, p. 1041.
- (20) だがこれまでも、Parpola の解釈とは全く異なった前提の下ではあ
るものの、上記 pūrva-kāya との関連で PM, UM 中の Pūrva-, Uttara-
の両語を解釈した学匠がいた。Rāmānuja の “mīmāṃsāpūrvabhāga-
ñātasya karmano’lpāsthiraphalatvāt uparitanabhāgāvaseyasya bra-
hmajñānasyānantākṣayaphalatvāc ca ……” (SriBh¹, i, p. 9, 11. 1~2)
は明らかに mīmāṃsā の pūrva-bhāga と uparitana-bhāga (≒uttara-
bhāga) との関わりで PM, UM 中の Pūrva-, Uttara- を説明するものと
考え得る。だが Rāmānuja は、Parpola のように Jaimini による一つの
作品としての MS を前提としていたわけではなく、「Jaimini による 16

章と, Bādarāyaṇa (= Vyāsa) による BrS (= Śāriraka) は, *M-Śāstra* としては、一つである」との Vṛttikāra の言 (註37参照) に順じた上で, “pūrvottaramīmāṃsayor” (ibid., p. 9, ll. 5~6) と関連づけている。これは, i), ii), iii)等に於ける PM, UM の意義づけとは異なって, 対象となる Veda とは関わりなく PM, UM を説明する点で, 特異なものである。それに対して Sri Uttamur Viraraghavacharya は, *Bhāṣyārīthadarpaṇa* 中で上記 “pūrvottaramīmāṃsayor” を次の如く注釈している。“pūrvottareti/ekasmin kāye pūrvakāyottarakāyabhedavad iti bhāvaḥ/” (BhAD, SriBh¹, i, p. 9, ll. 25~26)。今後, PM, UM の歴史上の用例の精査を待って, PM, UM の本来の意味とその変遷を伺う際にも, 考慮すべき重要な資料と考える。

- (21) Cf. Parpola 1981, p. 148, ll. 30~32 & n. 12.
- (22) Parpola 1984, p. 38, l. 16 に拠る。
- (23) 現行 MS, BrS に対して Ur-MS, Ur-BrS が想定されるわけは, 主として現行両作品中に, 伝統的に作者に擬される Jaimini, Bādarāyaṇa の名前が頻出することによる。著者が自らの著作中に自らの名前を引いてその主張を記すことが, 自然なこととは考えられないからである。その結果, 現行 MS, BrS が編纂されるに先立って, Jaimini, Bādarāyaṇa による謂わば Ur-MS, Ur-BrS が存在した, しかも Ur-MS は Ur-BrS に先行すると説明されるに到っている。
- (24) Parpola によって引かれている近・現代の学者達の種々解釈も, 必ずしも歴史上の諸文献を明確にその拠り所としたものではない。
- (25) YS, p. 2, ll. 24~25.
- (26) ibid., p. 2, l. 26.
- (27) MD, i, p. 4, ll. 2~3.
- (28) Cf. Parpola 1981, p. 146, n. 4, etc.
- (29) Cf. ibid., pp. 145~147.
- (30) Cf. SSS, pp. v~xviii, P. Hacker, *Kleine Schriften*, Wiesbaden, 1978, pp. 55~58.
- (31) X'-Mīmāṃsā の X'としては, karman, dharma, brahman, śāriraka, bhakti, praṇava, jyotis, pramāṇa, kāvya, paśvāmbha 等がある。これら具体的に考察の対象を表わすものとは別に, pūrva, madhyama, uttara がある。
- (32) このことは, Veda の側の例えば, Karma-K に関して考察を加える作品 (or その一部分) もまた, Karma-K と呼ばれることがあるというこ

とを改めて確認するためである。*Vākyapadiya* や *Brahmasiddhi* の第一部分が、*Brahma-K* との呼称で呼ばれるし、SK の別名として知られる *Devatā-K* は、同時に *Nirukta* の一部分の名称でもあるということを忘れてはなるまい。Cf. *Siddhānta Ratnāvalī* (Thanjavur, 1982), *Bhūmikā*, pp. 13~14.

- (33) BrSSBh¹, p. 46, l. 1, BrSSBh², p. 26, l. 2.
 (34) Cf. BrSSBh and BrS I-1-1.
 (35) 中村前掲書 p. 62, l. 14~p. 63, l. 3.
 (36) SV, (Pratijñāsūtra 13ab), p. 5, l. 25.
 (37) SriBh¹, i, p. 9, ll. 4~5. *Mīmāṃsā* を全 20 章とする見方と深い関わりを持つこの引用を初め、*Rāmānuja* は *Bodhāyana* の *Vṛtti* からの引用を屢々行っているが、*R. Mesquita* は近年興味深い指摘をしている。Cf. *Rogue Mesquita, "Rāmānujas Quellen im Mahāpūrvapakṣa und Mahāsiddhānta des Śribhāṣya"* (WZKS, Bd. 28, 1984, pp. 179~222), p. 220, ll. 1~3.
 (38) 中村元『ヴェーダゲータ哲学の發展』東京 1981 (一刷 1955) pp. 56~92 参照。
 (39) Cf. *Lariviere*, op. cit., p. 186, ll. 27~29.
 (40) Cf. S. K. Aiyangar, "Viṃśaty-Adhyāya-Nibaddham. *Mīmāṃsā-Śāstram*", *Woolner Commemoration Volume* ed. by Mohammad Shafi, Lahore, 1940, pp. 1~6, etc. なお、この Aiyangar 論文は、駒沢大学の吉津宜英、大西龍峯両先生の御蔭をもって参照するを得た。記して甚深の謝意を表したい。
 (41) 註(3)参照。
 (42) Cf. MD, vi, p. 387, ll. 14~15, vii, p. 165, ll. 23~24.
 (43) Cf. BrSSBh¹, p. 839, l. 3, BrSSBh², p. 756, l. 3.
 (44) とはいえ、*Kumārila* の TnV に対する注釈中で SK に言及する (NS, p. 145, l. 27) *Someśvara* を初めとして後代の学匠達の中には時に言及する者がある。
 (45) 種々ある BrS に対する注釈にはほとんど必ずと言ってよいほど *Śaṅkara* と同一のストラ (i.e. SK II-2-36) が引かれている。
 (46) Cf. SriBh ad BrS III-3-42, SriBh¹, ii, p. 734, ll. 1~2.
 (47) Cf. V. A. Ramasvami Sastri, "Further Light on *Saṅkarṣa-kāṇḍa*", *Siddha Bharati*, II, Hoshiarpur, 1950, pp. 102~105, SK² Appendix, SK³ Appendix C, etc.

- (48) Cf. Lariviere, op. cit.
- (49) 拙稿「*Prapañcahṛdaya* 試論」『駒澤大學佛教學部研究紀要』44号(1986. 3予定) 参照。
- (50) PH, SSS, SMSの成立年代は明確ではないが、今その三著作の相互関係について簡単に触れておく。PH, SSSには、Rāmānuja (AD. 11~12C)の名前は引かれていない。PHはSKの注釈者たる Devasvāmin (AD. 11C?)には言及している。SMSにもSSSのものと思しき引用がある。SMSはRāmānujaに言及している。SMSの作者はPHとSSSの両書を知っていたと見なし得る。PHはRāmānujaの名前に言及していないが、Rāmānuja以後(同時代?)と信ずる根拠がある。註(60)参照。
- (51) Lariviere, op. cit., p. 183, ll. 17~20.
- (52) 現行SKの内容については、SK³, pp. x-xliiに詳しい。Cf. PH, p. 41, 1. 18~p. 42, 1. 3, SMS, p. 10, ll. 14~20.
- (53) Lariviere, op. cit., pp. 183~184, n. 20.
- (54) Cf. AnuV, p. 23, ll. 7~8.
- (55) 現行SKと比較せよ。Cf. SK³, p. 1 & 220.
- (56) SK². Appendix, p. 18, ll. 5~11.
- (57) *ibid.*, p. 18, n. 1.
- (58) 伊藤前掲論文 p. 175, 下 ll. 2~10.
- (59) TT, p. 44, ll. 9~11. Cf. *Satadūṣaṇī* (UVG, 1974), p. 15, ll. 1~2.
- (60) これは、Vedāntadeśikaの上記引用部に対する伊藤氏の誤読 (or 未読) によるものと思われる。氏は“…… itī tattvavṛddhāḥ”をどのように解したのであろうか。Cf. SK³, p. v, ll. 5~9.
- (61) 実のところ、この問題の三スートラに関しては、S. Subrahmanya Sastryが、上記三人に先立って既に明確に言及している。Cf. *Ābhogaḥ-Kalpataru-Vyākhyā by Lakṣmīnṛsiṃha* (Madras, 1955), pp. xix~xx.
- (62) 本文引用 iv) 参照。
- (63) Cf. SK³, p. v, ll. 3~5.
- (64) AS, p. 34, 1. 7.
- (65) TT, p. 44, 1. 9.
- (66) SPR, p. 115, 1. 4, SRBh, p. 32, 1. 25~p. 33, 1. 1, p. 75, 1. 22. Cf. F. Otto Schrader, *Introduction to the Pañcarātra and the Ahirbudhnya Saṃhitā*, Madras, 1916, pp. 15~16, etc.
- (67) SRBh, p. 89, 1. 29. おそらく、*Sāṅkarsaṇa-Saṃhitā*と同一の著作?
- (68) Lariviere, op. cit., p. 194, n. 92.

- (69) SchraderはこのUtpalavaiṣṇavaと、Pañcarātra派の各種 Saṃhitāとの関わりを論じているにも拘らず、Saṅkarṣaṇa-sūtraには触れていないようである。Cf. Schrader, op. cit., pp. 18~19. (但し Utpalaの著作筆者未見)
- (70) K. K. Handiquiは、明らかにヴィシュヌ教の著作としている。Cf. K. K. Handiqui, *Yaśastilaka and Indian culture*, Sholapur, 1968, pp. 363~364.
- (71) SK², p. xii, ll. 11~12.
- (72) やはり Pañcarātra 派の著作か。
- (73) Cf. Lariviere, op. cit., pp. 184~186.
- (74) *ibid.*, p. 186, ll. 4~5.
- (75) *ibid.*, p. 186, ll. 18~19.
- (76) 伊藤前掲論文 p. 175, 上 ll. 7~12.
- (77) PrA, p. 44, 左 ll. 13~14. Cf. PBheda, p. 23, 1. 5.
- (78) ST, Bhūmikā, p. 1, ll. 24~26.
- (79) “karmopāstijñānakāṇḍā vedesv iva matā iha/” (GG, p. 1, 1. 11), “ye devayānapityānādibhedena karmopāsanājñānakāṇḍabhedena jñānavijñānasamyagjñānabhedena vā viśvena vyāvahārikajivena carṣaṇā vikalpitā ye tripathah trayah panthānah santi, ……” (TPUV, SU, p. 1, 1. 14~p. 2, 1. 1), “…… karmopāsanājñānakāṇḍa-prakāśakaiḥ ……” (SiUV, SU, p. 97, 1. 5), etc. こうした三種の分類法は、例えば *Bhagavadgītā* 中の karma-yoga, jñāna-yoga, bhakti-yoga との三分類法に呼応するものである。またこれとの関連で言えば Bhakti-K と Jñāna-K, Brahma-K 等との関わり, Bhakti-Mimāṃsā と Karma-Mimāṃsā との関わりについて記す Svapneśvara (AD. 10~11C?) の *Sāṅḍilya-Bhakti-Sūtra* に対する注釈等も興味深い。Cf. SBSSBh, p. 70, 158, 246, 249, 250.
- (80) Cf. F. Otto. Schrader, op. cit., etc.
- (81) 普通 Vāsudeva, Saṅkarṣaṇa, Pradyumna, Aniruddha として知られている。Saṅkarṣaṇa がヴィシュヌ教の内部で 4 vyūha の一つとして取扱われる面を持つ一方、Vāsudeva 等と共に、固有の信仰対象 (Saṅkarṣaṇa 信仰) としてかなり古い起源を持つものであることが各種研究において指摘されている。Cf. Sir R. G. Bhandarkar, *Vaiṣṇavism, Śaivism and minor religious systems*, Strassburg, 1913, pp. 3~4, etc., R. N. Dandekar, “The beginnings of Vaiṣṇavism” (IT, Vol. III-IV,

1975~1976, pp. 169~186), p. 174ff., etc.

(82) これとの関わりで言えば、Mīmāṃsā と関連する Saṅkarṣaṇa という人物 (or 神格) が歴史上存在したか否かとの問題も興味深い。例えば Jayanta Bhaṭṭa (AD. 9C) のユニークな「学説綱要書」とも言うべき諷刺劇 *Āgamaḍambara* の記すところに注目したい。即ち「現実に対応する人物がいたかもしれない」その戯曲の主要登場人物 Saṅkarṣaṇa (!) が Pañcarātra 派の宗教者であって、しかも “mahāmimāṃsaka-Saṅkarṣaṇaḥ” (AD, p. 56, 1. 15) であることにである。Cf. *ibid.*, p. xxiv, ll. 14~18, p. xxviii, ll. 7~12.

さらにまた、Pañcarātra 派の主張を Saṅkarṣaṇa-K と結び付けたと思しき用例もある。BrS 第 2 章の概説を与える箇所 *Ṣaḍḍarṣanī Siddhānta Saṅgraha* の著者は次のように記している (従来の SK 研究では未報告)。“dvitiye'dhyāye sarvatantrair virodhaḥ pariḥṭaḥ/…… nyāyavaiśeṣikayor api bāhyamatanirākaraṇapūrvakam ṣoḍaśapadārthī, ṣaṭpadārthīnirūpaṇena vaidikātmani manoniveśane param abhīniveśaḥ/pūrvamimāṃsāyās ca dvādaśalakṣaṇyāḥ karmānuṣṭhānena manaśuddhidvārā vividiṣyām upayogaḥ/saṅkarṣaṇakāṇḍasyā'pi devatānirūpaṇena tadupāsane viniyogaḥ/sāṅkhyasya ……/yogasya ……” (SDSS, p. 41, ll. 12~20) BrS II-2-42-45 (BrSSBh による) は Pañcarātra 派の所説が批評されていることで有名な箇所であるが、上記 Saṅkarṣaṇa-K との記述はその部分に関して行われたと考えられる。また、SDSS は、“sthūlarundhatīnyāyena karmakāṇḍopāsanaḥkāṇḍayor upapattiḥ” (*ibid.*, p. 40, ll. 12~13), “kiṃ copāsanaḥkāṇḍasyā' pi mandānugraheṇa tṛtiye sādhanāni nirṇitāni” (*ibid.*, p. 42, 1. 2), “upāsanaḥkāṇḍasyāpi sthūlarundhatīnyāyena śuddhabrahmapratipattāv evopayogāt” (*ibid.*, p. 48, ll. 6~7) との記述を与えている。なお、sthūlarundhatī-nyāya に関しては、C. G. A. Jacob, *Laukikanyāyāñjali Part I* (2nd ed.), Bombay, 1907, pp. 5~6 を参照。

(83) Cf. S. K. Aiyangar, *op. cit.*, p. 3, ll. 36~38.

(84) NN, BrSSBh², p. 756, 1. 35.

(85) それとも、Kāṇḍa の付かない単なる Saṅkarṣa か。

(86) Cf. Lariviere, *op. cit.*, p. 180, SSA, i, p. 40, ll. 17~18, etc.

(87) 本稿引用 i) のヴィリアントには、“tathā devatākāṇḍasya Saṅkarṣaṇa/” に対して “tathā devatākāṇḍasya Saṅkarṣaṇena/” がある。これに対して、Parpola は従来の解釈とは全く異なった新解釈を示してい

る (Parpola 1981, p. 154, n. 37)。即ち “I would like to adopt the latter reading and offer the following translation: “Similarly, leaving out the Devatākāṇḍa, a commentary upon the Brahmakāṇḍa was composed by ……” とである。Parpola の採る読みとは, “tathā devatākāṇḍasya saṅkarṣaṇena brahmakāṇḍasya …… kṛtam/” である。つまり, 従来, Devatā-K の注釈者として Saṅkarṣa 乃至 Saṅkarṣaṇa を伝えるその部分の saṅkarṣeṇa (or saṅkarṣaṇena) を “leaving out” という意味の単なる副詞句と解した上で, 続く Brahmakāṇḍa の注釈者を伝える文に取り込もうというものである。だが, この Parpola の解釈も全くの思いつきに過ぎず, 到底認め難いものである。この, Tantra-K, Devatā-K, Brahma-K に対する諸注釈者について記す部分では, その前に Pūrva-Mīmāṃsā-Śāstra (= Dharma-Mīmāṃsā-Śāstra) と Uttara-Mīmāṃsā-Śāstra とが二つに大別され, 前者は Tantra-K と Devatā-K, 後者は Brahma-K と明確に規定されているのである。従って Pūrva-Mīmāṃsā-Śāstra の内の Tantra-K だけの注釈者 (= Śabaravāmin) に対して Devatā-K (= SK) を “upekṣya” (omitting) するとの表現は意味を持ち得ても, Brahma-K だけの注釈者にとって, Pūrva-Mīmāṃsā-Śāstra の, 特に Devatā-K だけを取り出した上での Devatā-K を “saṅkarṣaṇena” (leaving out する) との表現は全く意味を持たないのである。現在ある PH のテキストによっては, その部分は従来の通り, Devatā-K の注釈が Saṅkarṣa (or Saṅkarṣaṇa) によって著わされた, と解する他ないように思われる。おそらく, SMS で “iha (= Devatā-K: 筆者註) bhāṣyakāraḥ Saṅkarṣaḥ/” (SMS, p. 10, ll. 13~14) と記す匿名の著者は, PH のその部分(?) を我々と同じように解して, パラフレーズしたものと考えられる。

(88) 註(87)参照。

(89) 本稿引用 ii), Śloka 20~21 を参照。

(90) SMS, p. 15, ll. 19~20 の引用句は SSS, p. 6, ll. 10~11。註(50)参照。

(91) Lariviere, op. cit., p. 185, ll. 7~8。

(92) 『ブラフマ・スートラの哲学』 p. 40, ll. 7~8 参照。

(93) HGU, VU, p. 404, l. 23~p. 405, l. 1。

(94) *Mahābhārata* 等の作者として知られる Vyāsa と Bādarāyaṇa を同一視する傾向がやはり AD. 10C 頃より顕著になる。

(95) Lariviere, op. cit., p. 181, l. 3ff & n. 10。

(96) Patrick Olivelle, “Praṇavamīmāṃsā: A newly discovered work of

Vidyāraṇya”, ABORI, 62, 1981, pp. 77~101.

(97) *ibid.*, p. 84, 1. 3. Cf. Lariviere, *op. cit.*, p. 181, ll. 4~5.

(98) Lariviere, *op. cit.*, p. 181, ll. 8~9. だが、実のところ、この Upāsanā-K を現行 SK と結び付け得る根拠は何一つない。

〔付記〕 本稿中の下線は全て筆者による。

略号表

AD: Āgamaḍambara, Darbhang, 1964.

AnuV: Anuvyākhyāna ed. & tr. by Suzanne Siauue, Pondichery, 1957.

AS: Adhikaraṇasārāvali, UVG, 1974.

BhAD: Bhāṣyārthadarpaṇa → SriBh¹.

BhD: Bhāṭṭa Dīpikā of Khaṇḍadeva with Prabhāvali of Shambu Bhaṭṭa, ed. by N. S. Ananta Krishna Sastri & Vasudeva Laxmana Sastri Pansikar, Bombay, 1921.

BrS: Brahma-Sūtra → BrSSBh¹ & BrSSBh².

BrSSBh: Brahma-sūtra Śāṅkara Bhāṣya → BrSSBh¹ & BrSSBh².

BrSSBh¹: BrSSBh with other commentaries, Bombay, 1938.

BrSSBh²: BrSSBh with other commentaries, Delhi etc., 1980.

CSG: Chatusslokibhashyam, Sthothraratnabhashyam, and Gadyatrayabhashyam, ed. by Chettaloor V. Srivatsankacharyar, Madrass, n.d.

GG: Gaṇeśagītā with Nilakaṇṭha's Ṭikā, AnSS 52, 1906.

HGUV: Hayagrīvopaniṣad-vyākhyā of Śrī Upaniṣad Brahma-Yogin → VU.

JSAS: Jaiminiyasūtrārthasaṅgraha, TSS 156, 1951.

KV: Kāṣikāvṛtti, 6 pts, Varanasi, 1965-1967.

MD: Mīmāṃsādarśana, 7 pts, AnSS 97, 1970-1975.

MS: Mīmāṃsāsūtra → MD.

NN: Nyāyanirṇaya → BrSSBh².

NS: Nyāyasudhā, ChSS 14, 1902-1909.

NSi: Naiṣkarmyasiddhi with Jñānottama's Bhāṣya, Poona, 1980 (4th ed.).

PA: Padārthādarśa → ST.

PBheda: Prasthānabheda, ed. A. Weber, Berlin, 1850.

PH: Prapañcahr̥daya, TSS 45, 1915.

PrA: Prabhāvalī → BhD.

SBSSBh: Śāṇḍilya Bhakti Sūtra with Svapneśvara Bhāṣya, ed. & tr. by Swami Harshananda, Mysore, 1976.

SDSS: Śaḍdarśanīśiddhāntasaṅgraha, Thanjavur, 1980.

SiUV: Sītopeniṣad-vyākhyā of Śrī Upaniṣad-Brahma-Yogin → SU.

SK: Saṅkarṣa-kāṇḍa → SK¹ & SK² & SK³.

SK¹: Saṅkarṣa Kāṇḍa or the last four chapters of Jaimini, with the commentary called Bhāṭṭa Candrikā, of Bhāskara(-rāya), ed. by Rama Misra Sastri, The Pandit, 14-16 (the New Series), 1892-1984.

SK²: Saṅkarṣa Kāṇḍa Sūtras of Jaimini, ed. by K. V. Sarma, Hoshiarpur, 1963, V.I. Series 18.

SK³: Saṅkarṣa Kāṇḍa of sage Jaimini with the Bhāṣya of Devasvāmin, ed. by S. Subrahmanya Sastri, Madras, 1965.

SMS: Sarvamatasaṅgraha, TSS 62, 1918.

SPR: Śrī Pañcarātrarakṣā, ALS 36, 1967 (2nd ed.).

SRBh: Stotraratnabhāṣya → CSG.

SriBh: Śrībhāṣya → SriBh¹.

SriBh¹: SriBh with Bhāṣyārtha Darpaṇa of Abhinava Deśika, 2 pts, UVG, 1963-1964.

SSA: Siddhāntasiddhāñjana, 4 pts, TSS 47, 48, 58, 61, 1916-1918.

SSS: Sarvasiddhāntasaṅgraha, Madras, 1909.

ST: Śāradātilaka with Padārthādarśa, KSS 107, 1963.

SU: The Śākta Upaniṣad-s with the commentary of Śrī Upaniṣad-Brahma-Yogin, ed. by A. Mahadeva Sastri, ALS 10, 1950 (1st ed., 1952).

SV: Śloka-vārttika, Prāchyabhāratī S. 10, Varanasi, 1978.

TnV: Tantravārttika → MD.

TPUV: Tripuropaniṣad-vyākhyā of Śrī Upaniṣad-Brahma-Yogin → SU.

TT: Tattvaṭikā, UVG, 1974.

UVG: Ubhaya Vedānta Granthamālā.

VU: The Vaiṣṇava Upaniṣad-s with the commentary of Śrī Upaniṣad-Brahma-Yogin, ALS 8, 1979 (2nd ed.).

YS: Yājñavalkyasmṛti with Mitākṣarā, Bombay, 1949 (5th ed.).